Book Review 13-6　戦争を扱った小説　＃抹殺

『＃抹殺』（柴田哲孝著）を読んでみた。著者は1957年生まれ。2006年『下山事件　最後の証言』で日本推理作家協会賞と日本冒険小説協会大賞、07年『ＴＥＮＧＵ』で大藪春彦賞を受賞する。元首相襲撃の真相に迫る『暗殺』で話題に（Book Review 24-14歴史を参照）。

2012年1月から2017年5月まで、日本国政府は自衛隊を南スーダンへ派遣していた。本書は、その南スーダンでのPKO活動（Peacekeeping Operations）の過酷な描写から物語は始まる。
PKO活動とは、紛争が発生していた地域において、その紛争当事者間の停戦合意が成立した後に、国連が国連安全保障理事会の決議に基づいて、両当事者の間に立って停戦や軍の撤退を監視することで再び紛争が発生することを防ぎ、対話を通じた紛争解決が平和裡に着実に実行されていくことを支援する活動である。
その南スーダンでの自衛隊の過酷なPKO（出動すべき各国部隊が政治的判断によって辞退し、大統領直属の政府軍の占拠したホテルから国境なき医師団の日本人医師を含む３人の女性を自衛隊員が救出、そのとき隊員の１人が殉職）は、実際にはまさに戦闘であった（PKO部隊として派遣された「特戦群」メンバーは、選りすぐりの戦闘員である）。このことが後に自衛隊日報隠蔽事件に発展する。

帰国して除隊した7年後、元隊員の死体が駿河湾で発見される。実は元自衛隊員の死亡事故が三件続いていた。共通するのは、政情不安下の南スーダンにPKO部隊として派遣された「特戦群」メンバーだったことである。同隊所属のKは「俺たちは狙われている」と察知して、残りのメンバーを招集して突破口を探り始める。事故現場は浜名湖周辺に集中している。時を同じくしてPKO活動中に危機から救った女性医師（浜松医大出身）がアフリカから帰国する。女性医師の帰国と同僚三人の事故は無関係ではないようだ。誰が、なぜ「特戦群」メンバーの抹殺を企てているのか。

ページを捲ってゆくと、その裏に隠された国際間の石油利権が絡んでいることが判明する。救出した女性医師はただの日本医師ではなかったのだ。父親が外務省外交官で母親が米国人で、米国生まれなので二重国籍を持つ。その母親の家系がすごい（あまりに非現実的）。2歳の娘を夫に託して突然、国境なき医

師団に入隊して最も危険な紛争地に赴任している（あまりにも非現実的であるが・・・、そして現在の所属組織も）

ここで自衛隊の成立と PKO 活動の問題点について調べてみた。

自衛隊は、朝鮮戦争を背景に、1950 年に警察予備隊が創立され、1951 年に日米安全保障条約により、日本は再軍備を要求された。このとき吉田茂は拒否しようとしたとか。1952 年に保安隊に改編される。1954 年に自衛隊（陸上・海上・航空の三軍）に改められ、防衛庁設置法案と自衛隊法案が閣議決定される。自衛隊の目的は「わが国の平和と独立を守り、国の安全を保つ」こととなっている。

PKO 活動には、次のような問題点がある。

- 紛争当事者が停戦する気が不明。
- PKO の中立性が不明。
- 政治的や経済的な動機で派遣されることがある。
- 実際に PKO 部隊が派遣されてくるまで時間がかかる。
- コストや隊員の怪我・死亡というリスクがあり、決断を渋る国が多く、人が集まらない。
- 経験が少ない兵士が派遣されたりすることがある。
- 不公平な行為によって国連への信頼の失墜や失望が広がっている地域もある。

自衛隊員の場合、本書のように生命の危機が迫っても自分から攻撃はできない。また殺戮を得意とする「特戦群」が実際に存在するのか定かではない。

浜名湖周辺が戦闘場面で登場する。浜松医大は私が若いときに研修のために僻地から 2 時間かけて 7 年間通った大学であり、懐かしい。ここでの戦闘シーンはスリリングである。

著者にはフィクションよりも、ノンフィクションが似合う。